

「男、突っ走る！」

第62回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (22)

『オフィスツリーイン』代表

木内 真保 (49)

雅也の母

本部 明美 (21)

元名古屋カフェ調理専門学校学生

安本 真苗 (57)

『スクエア・トラスト』代表取締役社長

山岡 智行 (32)

映画プロデューサー

國村 英作 (51)

まちづくり会社社長

伊藤 理沙 (32)

若手起業家

大島 幸次 (51)

広告制作会社社長

橋崎 悟 (47)

WEB会社社長

1 『スクエア・トラスト』・事務所

雅也と安本が話している。

安本「原稿のほうは、大分良くなったわ。けど、本来ならば最初の段階であれぐらいのものを書いてもらわなきゃ困るわ」

雅也「はい……」

安本「ほぼ最初の仕事で、こういう状態になっちゃったけど、木内君本当に大丈夫？

私は、それが心配だわ」

雅也「……」

安本「個人事業を始めるって聞いたとき、頑張って応援してあげようと思ったけど、今の状態がこれからも続くようじゃ、残れないわよ。個人事業とはいえ、一国一城の主なんだから、仕事をしていくうえで、どうして行ったら良いのか、一度考えたほうが良いかもしれないわよ」

雅也「はい……」

安本「呼び出して悪かったわね。今日は、もう帰って良いわよ」

雅也「失礼しました」

と、一礼して、去っていく。

2 栄の街

雅也が険しい顔で歩いている。

N「個人事業をスタートさせてから、早いもので一ヶ月が経った。ゴールデンウィークには、専門学校と同級生たちとの集まりがあり、まだ卒業式から数えて日が浅いはずなのに同級生たちの顔ぶれを見ると、不思議と懐かしい気持ちになった。連休が明けてすぐ、僕は何とか安本社長から依頼を受けた仕事を終えて、今度はひと段落する間もなく、千葉の山岡プロデューサーと相談をしながら、映画脚本の修正作業に追われました」

3 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也がスマホで電話をしながら、台本に赤ペンで修正やメモなどをしている。

雅也「え、あのキャラの出番をもっと増やしてほしい？」

4 千葉の公園（夜）

山岡がスマホで話している。

山岡「そうなんです。実はあのキャラをキャスティング予定のアイドルの子、どうやら事務所としてはこれから売り込みたいそうで、どうせキャスティングするならば、存在感があつて、それなりに目立つようにしてほしいと」

雅也の声「ヒロイン役にはできないんですか？」

山岡「ヒロインには、もう別のアイドルグループの中心メンバーをキャスティングしてるんですよ」

5 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也がスマホで話している。

雅也「そうでしたか。出番を増やすとなると、

全体構成にも影響しませんかね。場面がこれから増えると、ロケ場所確保も難しいんじゃないありませんか？」

山岡の声「ロケ場所のことは、何とでもなります。今はとにかく、キャラの出番調整をしたほうが良いかと」

雅也「分かりました。あと、この間の構成だと、一旦は前篇後篇としましたけど、やっぱり、分けずに一本化しますか？」

山岡の声「前後篇のアイデアを出した僕がこんなこと言うのはなんですが、前後篇よりも一本のほうが良いと思ってます。一度、どんな風になるか見てみたいものもあったものですから」

6 千葉の公園

山岡がスマホで話している。

雅也の声「ところで、クライクインはいつ頃を予定してますか？」

山岡「一応六月の中旬を予定しています。も

ちろん、クランクインの後も何かしら脚本の修正は入ることになるかとは思いますが」

雅也の声「そんなのはとっくに覚悟してます」

山岡「すいません、いろいろご無理言うことになってしまつて」

雅也の声「いえいえ、直しはいつでも対応しますから」

山岡「今回は、出演者オーディションもしたり、いろんな芸能事務所やアイドル事務所にもキャスティングをお願いしてるんです。なので、どうしても各関係者からの要望も多くて」

雅也の声「そういった意見をまとめて、僕に伝えなければいけないんですもの、山岡さんも大変ですね」

山岡「（苦笑して）まあ、それが仕事ですから。実は、そんなに実績もないのに、出番を増やしてほしいって注文してきて、それで僕が反論したら、こんな役やるぐらいなら辞めますって、キャスティングを予定し

ていた俳優が降板したんですよ」

雅也の声「それは、僕の作ったキャラクターが魅力的じゃなかったということでしょうか？」

山岡「いえいえ、そういうわけじゃありません。木内さんは、こちらの要望通り、登場人物一人ひとりにフルネームとセリフがちやんとあつて、そればかりか登場人物の簡単な経歴や設定まで考えていただいて。なのに降板するなんて、わがままですよ。まだ撮影だつて始まつてないのに」

7 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也がスマホで話している。

雅也「そうでしたか。まあ、去る者は追わずですよ。僕だつて、まだ偉そうにものを言える立場ではありません。でも、僕の脚本や作り上げたキャラクターに不満があつて、納得できない状態で演じてもらうこと考えたら、潔く降板してもらったほうが、こつ

ちもせいせいしますよ」

8 千葉の公園（夜）

山岡がスマホで話している。

山岡「木内さん……」

雅也の声「何で降板なんかしたんだろうって、後悔させるぐらいの作品を作りましょう。

僕も、折を見て撮影現場にお邪魔しますから」

山岡「ありがとうございます。ぜひ、お待ちしております。遅くまですいませんでした。では、引き続きよろしく願います。失礼します（と電話を切る）」

9 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也が、パソコンで脚本の修正作業をしている。

N「その後、何度かの修正をしたうえで、脚本を何とか書き終えることができた。時間にして約九十分。決定稿に至るまで、八回

も修正を繰り返していた」

10 ビル・会議室

異業種交流会が行われており、営業マンをはじめ様々な男女が来ており名刺交換をしている——その中に雅也も姿もあり、名刺とチラシを配って話をしている。

N 「脚本修正と同時進行で、僕は営業活動のために、名古屋へ出向き、異業種交流会というものに参加。その場にいる参加者の方にひたすら名刺やチラシを配り、営業活動をしていた」

11 木内家・居間（夜）

雅也が帰宅する——真保が食器を洗っている。

雅也 「ただいま」

真保 「おかえり。駅から歩いてきたの」

雅也 「うん。たまには歩かないとね」

真保「だって、駅からここまで三十分以上はかかるのよ」

雅也「無理に送迎しなくても大丈夫だよ。そのためだけにわざわざ外出するのも面倒ですよ」

真保「そんなこと気にしなくても良いのに」

雅也「久しぶりに長い距離歩くと、足疲れるね。こりゃ、明日筋肉痛だ」

真保「そういえば、あんた宛に手紙来てたよ」

雅也「手紙？」

真保「東京からだった」

雅也「東京？」

真保「電話の横に置いてあるよ」

雅也、電話の隣に置いてある封筒を見る——差出人に、東京の住所と共に『本部明美』と書かれている。

雅也「明美ちゃんだ」

真保「明美ちゃん？」

雅也「ほら、卒業式の時に写真撮った、後輩の子いたでしょ」

真保「ああ、調理のほうの後輩だっけ？」

雅也「そうそう。けど、どうしたんだろう、

あの子から手紙が来るなんて」

真保「違う学校だったのに、そんなに仲良かったの？」

雅也「うん。ほら、オープンキャンパスのスタッフ、一緒にやってたから」

真保「そういえば、そんなこともやってたわね」

雅也「二年生のラストで一旦は引退したじゃん。でも、三年生の三月に三回だけ、限定復活したことがあったんだけど、その時なんてすごく喜んでくれてね」

真保「スタッフ、そんなに楽しかったの？」

雅也「楽しかったよ。キャンプにも行けたし、姉妹校の学生の友達もたくさんできたし。

それにさ、オープンキャンパスの時って、校舎見学って言って、学校の上から下まで体験入学に来た高校生たちに学校案内する時間があるんだけどさ、ずっとやってると、

自分が受けてない映像とかゲームとかイラストとかの授業説明もペラペラ喋れるようになってね。こんなにも、学校の三年間が早いなんて思わなかった。明美ちゃんは二年課程でしょ。自分が二年間で学校生活終わってたなら、こんな濃密な生活にはならなかったと思う」

真保「よく三年間やったわよ。気が付けば皆勤賞だったし」

雅也「本当ね。学校生活と同じぐらい、仕事も頑張らなきゃ」

真保「手紙読まないの？」

雅也「読んでくる（と出ていく）」

12 同・雅也の部屋（夜）

手紙を持った雅也が入ってくる――デスクに座ると、封筒を開けて手紙を取り出し、読み始める。

明美の声「木内先輩へ お元気ですか？ お仕事は順調ですか？ いや、特に用事がある

ったわけじゃないんですけど、ちよつとき
みしくなってきたからお手紙書きました

（笑） 東京での生活も少しは慣れてきま
した。まあ、朝日がのぼる前に起きて、始
発に乗って会社へ行って仕事して、家帰る
という繰り返しなんですけどね。休みの日
は何したら良いかまだ分かんないから家事
をしてテレビ見て一日を過ごしてます。だ
から早く遊びに来てください！ 去年は学
校ですぐ会えたのに、今は全然会えないの
が寂しすぎます……。東京でお花見できな
かったんで、紅葉見に行きましょう！ これ
絶対です！ 鶴舞は枯れてたし……。だから
行きましょう！ ご飯も行きましょう！ たく
さん遊んでください。東京の家にも来てく
ださい。またすぐ名古屋帰るので、その時
はよろしくお願いします！ あと、私の会
社のケーキ、食べてください（笑） 自分
はパンのほう作ってるんですけど、ケーキ
大きくて高いけど美味しいので、ぜひ！」

13 東京・マンション・明美の部屋（夜）

手紙を書いている明美。

明美の声「あ、あと卒業式の時のお手紙、すごく嬉しかったです。ありがとうございます。しました。いつからこんな話すようになったか分かんないけど、キャンプの時、面白い先輩だなんて思ったのは覚えています。こんなに仲良くなれて本当幸せです。いつかお互い良い意味で有名になれるといいですね。いや、ビッグになりましたよ！先輩の脚本がドラマとかになったら教えてください。ね。絶対見るんで！あと毎回盛大にお祝いしましょう（笑）もはや毎日パーティーで（笑）」

14 木内家・雅也の部屋（夜）

明美の手紙を読んでいる雅也。

明美の声「そろそろ寝る時間なので、寝ます！ではお元気で！体に気を付けてい

つまでも元気で頑張ってください 明美」

雅也、しんみりとした顔で、手紙を封筒に戻す。

15 駅・ホーム

電車が止まり、雅也が降りてくる。

16 商店街

雅也が歩いている。

N 「それからしばらく経ったある日、僕は隣の商店街で、シニア向けのフリーペーパーを立ち上げるといふ編集部があることを見つけ、発行人であるまちづくり会社の代表の方にアポを取り、ぜひライターとして関わってほしいという話になりました。今日は、他のスタッフも集まる編集会議があり、そこで僕を紹介していただけるといふことになりました」

17 『スタイル・タウン』・事務所

商店街の一角にある平屋テナント。

代表・國村英作（51）がパソコンで
仕事をしている——雅也が入ってくる。

雅也「おはようございます」

國村「おはよう、木内君。早いね」

雅也「一回しか来てないもんですから、迷子
にならないようにと思って、早く来たんです」

國村「もう少ししたらみんな来ると言うから、
座って待ってて」

雅也「はい。（と椅子に座ると）あの、本当
に僕がこちらの編集部の専任ライターをや
らせていただけるんでしょうか？」

國村「もちろん。この間来てくれたときにも
話したと思うけど、フリーペーパーを作る
うって編集部が発足して立ち上がったのは
良いんだけど、如何せんフリーペーパーの
中身を書いてくれる人がいなくてね」

雅也「確か、アドバイザーとして入ってる広
告制作会社の社長さんは、元々コピーライ
ターだったんですよね？」

國村「大島さんって言って、このまちづくり会社『スタイル・タウン』の取締役もやってくださってて、以前は地域情報誌の編集長を長年やっててね。それに、大島さんの会社は、このあたりで開催されるイベントで使うポスターやチラシやパンフレットやホームページといった広告制作全般を引き受けてて、行政とも取引のある、このあたりでは一番の会社なんだよ。だから大島さんが、このシニア向けフリーペーパーの専属ライターとなるのは現実的に厳しくてね。もしライターが見つからなかったら、僕か編集長の理沙ちゃんが書くしかないかなと思ってたんだよ」

雅也「國村さんが、編集長じゃないんですか？」

國村「僕は発行人という立場になって、編集長は理沙ちゃんなんだよ」

雅也「その理沙さんっていうのは……」

國村「いろんな介護施設で、介護レクリエー

シオンを企画して、講師を派遣する事業をやってる若手起業家なんだよ。理沙ちゃんの話聞いて、ぜひやろうってことになったんだよ。理沙ちゃんは、普段は地元であること名古屋を行ったり来たりしてて、あまりゆっくり話せる時間はないんだけど、このフリーペーパーは何とか形にしたいって言ってるんだ」

雅也「そうでしたか」

と、広告制作会社社長・大島幸次

(51) が入ってくる。

大島「おはよう」

雅也「おはようございます」

國村「おはようございます。大島さん、この子がライターの木内君です」

雅也「木内と言います。よろしくお願ひします」

大島「ああ、君が。國村さんから話は聞いてるよ。まだ専門学校卒業してすぐで、ライター一本で勝負するんだって？ 大したも

んだ。ぜひ、この企画で存分に腕を発揮してよ。期待してるよ」

雅也「ありがとうございます」

と、起業家・伊藤理沙（32）と、WEB会社社長・橋崎悟（47）が入ってくる。

伊藤「おはようございます」

橋崎「おはようございます」

國村「理沙ちゃん、橋崎さん、おはようございます」

雅也「おはようございます」

國村「今日から、ライターとして携わってくれる木内君です」

雅也「木内雅也です」

國村「こちらが編集長の伊藤理沙ちゃん。それから、フリーペーパーの公式ホームページを作ってくれているWEB会社社長の橋崎悟さん」

伊藤「伊藤理沙です」

橋崎「橋崎悟です」

雅也「よろしく願います」

國村「じゃあ、皆さん揃ったので、編集会議
始めましょう。（と資料を配って）これ、
今日のレジュメです。その前に、せっかく
なので、今日からライターとして携わって
くれる木内君の自己紹介から。じゃあ、木

内君」

雅也「はい。（と立ち上がると）木内と言いま
す。今日から、こちらの編集部でライタ
ーとしてお世話になることになりました。

この三月に専門学校を卒業したばかりなの
で、こちらでいろいろ勉強させていただけ
ればと思っています。学校では、シナリオ
ライターを専攻しており、記事や小説やキ
ャッチコピーやシナリオや雑誌や文芸誌の
編集など、とにかく文章と携わってばかり
いました。学校で学んだ経験を活かしなが
ら、こちらのお役に立てたらと思っています
す。よろしく願います」

拍手をする一同。

國村「今日は、全体の台割を正式に決めよう
と思います。スポンサーも、アポが取れた
ところは営業で僕と理沙ちゃんが行ってき
ます」

大島「発行のタイミングから遡って、スポン
サー決定は早いほうが良いかもしれない」
伊藤「月末にはある程度決めちゃいますか」
橋崎「ホームページにも、スポンサー募集の
ページアップしときます」

雅也、頷きながらメモ帳にメモをする。
N「新しい仕事、新たな出会いは、僕にとつ
てとても刺激をもらえた瞬間でもありまし
た」

つづく